先進校に学ぶキャリア教育の実践

地域と共に、生徒の「やってみたい」を育て「やってみる」を支援。次の挑戦へつなぐ

津和野高校
（島根・県立）

10年前まで統廃合の危機にあった津和野高校では、
生徒が数多くのプロジェクトを立ち上げ、地域と連携して活発に活動しています。
生徒の「やってみたい」をどのように育んでいるのか。探究プログラムを中心にご紹介します。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

総合的な探究の時間　地域連携　地域体験型講座　トークフォークダンス
プロジェクト活動　高校魅力化コーディネーター　全国生徒募集

統廃合の危機を経て地域探究が教育の柱に

島根県の中山間地域に位置する津和野高校。目指しているのは「『やってみたい』を『やってみる』にする学校」だ。宮島忠史校長はこう意気込む。

「何が正解かわからない現代、やってみたいことがあるなら実際にやってみることが大切。我々はそれを全力で支援したい」

同校は10年前まで生徒数の減少が続いており、統廃合の危機にあった。津和野町唯一の高校を失うわけにいかないと、2011年度より始まった高校魅力化・活性化事業を受けて、高校魅力化コーディネーターの配置、「しまね留学」（現・地域みらい留学）と呼ぶ全国からの生徒募集、学校敷地内に無料の町営英語塾「HAN-KOH」の開設など、県や町と連携してさまざまな施策に取り組んできた。生徒数の減少には歯止めがかかり、現在は200人ほどを維持。その3分の1は県外からの入学者で、教室にはさまざまな方言が飛び交う。

「学力の輪切りではなく、多様な文化・背景をもつ生徒が、さまざまな期待をもって一つの学校に集まり、お互いを認め合いながら歩んでいる学校です」（阿部志朗教頭）

そんな同校が、教科学習と並ぶ教育の柱として力を入れているのが、総合的な探究の時間を中心に展開する「T・PLAN」（T＝津和野の頭文字）だ。高校魅力化の一環で始めた地域の大人との交流プログラムを前身とし、毎年改良を重ね、19年度より現在のような3年間の体系的なプログラムとなった。その大きな目標は、「生徒が興味関心のあるテーマを発見し、そのテーマに取り組むことで、物事の本質を探り、自己理解を深めること」だ。

「地域課題の解決に取り組むこと自体も大事ですが、その課題に目を向けた『自分』というものに向き合い、掘り下げていくことを重視しています」（宮島校長）

同校は高校3年間を、気になること・やってみたいことを探す「テーマ発見期」、何かを考え実際にやってみる「トライ&エラー期」、学びを次の挑戦へつなぐ「俯瞰・発展期」の3ステップで捉えており、T・PLANもそのステップに沿って設計している（図1・2）。その内容について順を追ってみていこう。

地域に学ぶなかで「やってみたい」を探す

テーマ発見期にあたる1学年において、主要な活動の1つが「ブリコラージュゼミ」だ。「ブリコラージュ」とはフランス語で、あるものを活かして作る「日曜大工」などを意味する。町の「ひと・こと・もの」を組み合わせて作った講座を通じて、生徒に自らの可能性を広げる人や場所が身近にあると気づかせ、自分の興味関心を探っていくきっかけとするのがねらいだ。地域の人に講師を依頼して、10講座程度を年3回設定。生徒は毎回1講座を選択して参加する。講座のラインアップは、「農業体験」「議会に潜入」など町につ

School Data

1908年設立／普通科
生徒数198人（男子102人・女子96人）
進路状況（2022年3月卒業生）
大学33人・短大3人・専門学校等20人
就職9人
島根県鹿足郡津和野町後田ハ12-3
TEL 0856-72-0106

Outline

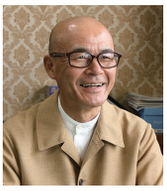
110年を超える歴史がある津和野町唯一の高校。目指す学校像は「『やってみたい』を『やってみる』にする学校」。2011年度に島根県から離島・中山間地高校魅力化・活性化事業に指定され、高校魅力化コーディネーターを配置し、全国生徒募集、地域協働による探究活動の拡充、無料町営英語塾開設などに取り組んできた。地域課題に取り組む部活動があることも特徴。

高校魅力化
コーディネーター
木村真二さん

高校魅力化
コーディネーター
玉木愛実さん

主幹教諭
村岡英子先生

教頭
阿部志朗先生



校長
宮島忠史先生

いて知る講座から、「難民の方々と話そう」「韓国語独学入門」のようなグローバルなテーマまで幅広い。高校魅力化コーディネーターとして地域の人と共に講座づくりに取り組む玉木愛実さんは、「五感を使った内容が多く、生徒は楽しそうに取り組んでいる」と語る。

1学年でもう1つの主要な活動が、生徒と地域の人が同数集まって一対一の対話を繰り返す「トークフォークダンス」だ。地域の人と出会い、コミュニケーションに前向きになる機会として、他校の実践を参考に導入。当日の運営は、地域の有志団体のボランティアによって行われる。

対話のテーマは「朝食に何を食べたか」といった軽いものから始め、「高校を選んだ理由は？」「ブリコラージュゼミで印象的だったこと」「高校でどんなことに挑戦してみたいか」など、徐々に生徒の自己開示を促していく。

「普段はあまり積極的に話さない生徒も、一対一という環境では話さざるを得ない。あまり大人と話す機会のなかった生徒も、自然に一歩踏み出せるようです」（高校魅力化コーディネーター・木村真二さん）

これをきっかけとして、地域の大人との継続的な交流を始める生徒もあるという。

個人と個人の信頼関係が地域連携を支える

こうした1学年の取組を見ただけでも、T-PLANが多くの地域の人の深い関わりによって成り立っていることがわかる。人口7000人足らずの町において、バラエティーに富んだブリコラージュゼミを開講し、トークフォークダンス協力者を生徒と同数集めるのは容易ではないと思われるが、「それほどの苦労はない」という。

「こちらからも声掛けしますが、地域の方から『こういうことを高校生と一緒にやってみたい』とお申し出いただくことが多いですね」（玉木さん）

同校で目立つのは、町役場や商工会議所などの〝組織〟としてというより、〝個人〟として積極的に関わる人の多さだ。

それは、教職員やコーディネーターが地域に出て人間関係を結んできた結果といえる。「一人ひとりの教職員が日常的に地域と膝を突き合わせ、表面的ではない関係性を築いていくことが大切」と宮島校長。東京から移住して同校に着任した玉木さんは、飲食店を巡ったりイベントを手伝ったりしながら少しずつ地域に馴染み、〝お互い様〟の感覚で同校に協力してもらえるようになったという。

「これまでも多くの学校現場で行われてきたように、組織対組織の関係性は効率

図1 津和野高校の3年間

図2 総合的な探究の時間「T-PLAN」の主な取組

1学年（テーマ発見期）	2学年（トライ&エラー期）	3学年（俯瞰・発展期）
○ブリコラージュゼミ（選択制体験型講座） ○トークフォークダンス	○プロジェクト活動	○3年間のまとめ（学んだことの言語化・発表）

地域の人が講師となる「ブリコラージュゼミ」。建築模型づくりの講座（右）や、メロンパークでの農業体験（左）など講座内容は多彩だ。

一対一の対話を繰り返す「トークフォークダンス」。幅広い年代の多様なプロフィールをもつ地域の人が参加。

的に連携を進めるうえで大切です。加えて、地域の方一人ひとりが教育に関心をもって学校に関わっていただくことも大切です。そして、生徒たちが地域でいきいきと活動しているのを見て喜んでくださり、一緒に何かやりたいという声につながっていくのだと思います」（玉木さん）

一人ひとりの状態に合わせてプロジェクトを支援

トライ&エラー期にあたる2学年では、1学年の活動で広げた興味関心を発展させ、やってみたいと思ったことに個人またはグループで挑戦する「プロジェクト活動」がメインとなる。

しかしながら生徒の状態には幅があり、1年生のころから課外でプロジェクトに取り組んできた生徒もいるが、まだやりたいことが見えていない生徒も少なくない。そこで、年度初めに生徒アンケートを行い、気になる・やってみたいプロジェクトのタネについて、「もっていない」「なんとなくもっている」「割とはっきりもっている」「もっているが迷いもある」の4択で聞き、生徒の状態を把握。まだやりたいことがない生徒には外部イベントや人を紹介するなどの支援を行い、やりたいことが明確な生徒には自走を妨げない距離感でもう一段高いチャレンジを促すなど、各状態に合わせた支援を行っている。

「プロジェクト活動」でハザードマップ作りに取り組むチーム。地域に出て情報収集を実施。

「実際にやってみて見えてくることもあります。まずは『いったん決めてやってみて、ダメだったら変えればいい』ぐらいの感覚で後押ししています」（玉木さん）

生徒はそうして「やってみたい」をテーマ設定につなげ、教員やコーディネーター、地域の人の伴走のもと、自らが主体となって探究活動を行う。例えば、地域の交流を促進したいと考えた生徒は、町を会場にした「津和野文化祭」というイベントを企画。地域住民と同校生徒が、ゲームや音楽、運動など共通の趣味嗜好を通して交流する機会をつくった（**Interview参照**）。また、地域の重要な産業である米づくりを盛り上げたいと考えた生徒2人は、農家レストラン経営者と連携したり、農家に宿泊して農業体験を行ったりしながら、新しいフレーバーのポン菓子の開発に取り組んだ。

「プロジェクトを実行するとなると、大人の方への交渉など想像していなかった場面にぶつかり、たくさん失敗もします。そのなかで、高校生にもできることがたくさんあるのだと学んでいます」（木村さん）

2年間の活動を振り返り進路目標の設定につなげる

3学年は「俯瞰・発展期」だ。各自の興味関心に基づいて活動してきた1・2学年のT・PLANをさまざまな方法で振り返り、自身の変化を見つめ、卒業後の挑戦につなげる。

例えば昨年度は、「NVC」（※1）の手法を応用し、印象に残っていることとその時の感情、その感情がなぜ生まれたのか、その根本で何を大切にしていたかについて生徒同士で対話を行い、自己理解の深掘りをした。また、「2年間の活動を通して変わった自分」について文章で表現。その内容は学年全体の発表会で共有したり、中学生向けオープンスクールや学園祭で外部に向けて発信したりする。

こうした一連のT・PLANの活動を通じて、将来の目標の方向性が見えてくる生徒は多い。担任との面談を重ねながら進路を絞り込み、その実現に向けて対策していく。

「生徒は進路に迷うとき、教員のほか、コーディネーターや町営塾の講師、地域の方にも相談しています。相談先が豊富にあるので、多様な視点からの意見が参考になるようです」（玉木さん）

おとなしかった生徒たちが互いに刺激を与え合い成長

このようにT・PLANはプロジェクト活動を核にした3年間のプログラムだ。ほかにも地域協働による探究活動が行われている高校は珍しくないが、同校のプロジェクト活動は、生徒の主体的な取組が際立っている。「参画のはしご」（※2）になぞらえた生徒アンケートでは、参画の度合いの上位2項目（私たちが発案し、周りの小・中・高校生や大人を巻き込む／私たちが発案し、私たちが実行する）の回答計は8割に及ぶ（**図3**）。

生徒の活動は、もはやカリキュラムの枠組みに収まらない。課程外でも生徒は自ら「小学生の放課後の居場所をつくりたい」「全国マネージャーサミットを開きたい」などと多様なプロジェクトを立ち上げる。また、同校最大規模の部活動「グローカルラボ」でも、生徒主体のプロジェクトがいくつも行われている。

しかしながら、入学当初から主体性や行動力のある生徒が多いわけではない。教職員も「大半は比較的おとなしい」と口を揃える。T・PLANをはじめとして地域に出て活動するなかで、徐々に力

※1　NVC：Nonviolent Communication＝非暴力コミュニケーション。アメリカの臨床心理学者マーシャル・B・ローゼンバーグによって体系化されたコミュニケーションの方法
※2　アメリカの環境心理学・発達心理学者ロジャー・ハートが提唱した、大人の社会に子どもが主体的に関わる段階を表すモデル

図4 2学年末の振り返りアンケート結果

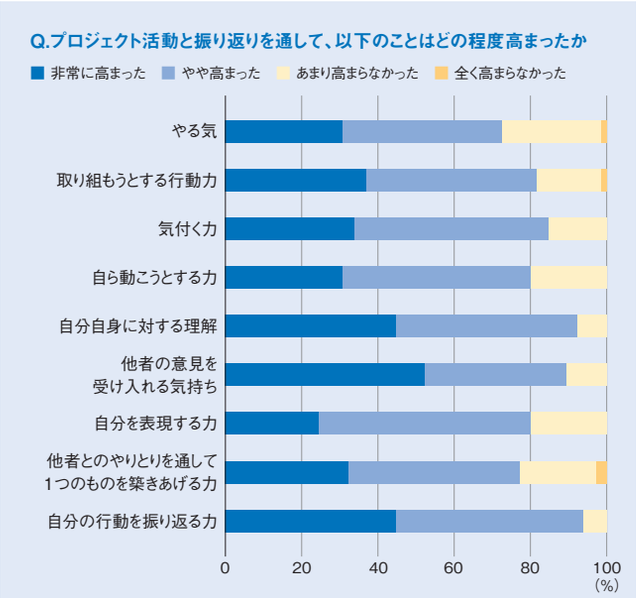
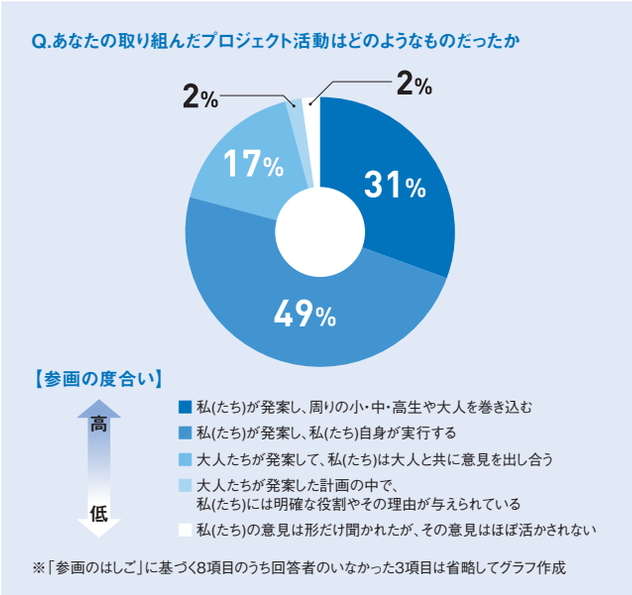


図3 プロジェクト活動に関する生徒アンケート結果



を発揮するようになっていくのだ。

「誰かが行動を起こすと、周りの生徒にも『手伝おう』『自分もこういうことやってみたい』という気持ちが芽生える。その連鎖のなかで、やってみたいと思ったことに挑戦するハードルが徐々に下がっていくようです」(玉木さん)

全国から集まった多様な背景をもつ生徒同士が刺激を与え合う効果も大きい。県外生は地域を新鮮な目で見て、地元出身者にはありふれたもののなかにも価値を見いだす。それが地元出身者の気づきにつながる。

「出身地によらず、最初は引っ込み思案だった生徒も積極的に発言するようになり、リーダー的な存在になる例もあります」(宮島校長)

さまざまな刺激を糧に、「やってみたい」に挑戦し、行動するなかで、生徒は着実に成長している。全員がプロジェクト活動を経験した2学年末の生徒アンケート結果では、多くの生徒が「行動力」や「表現力」、「自分自身に対する理解」など、幅広い面での成長を自覚している(図4)。振り返りコメントからも、「知らなかった自分の一面に気づくことができた」「自分にできることがあるとわかった」などと自己理解を深め、「行動力が高まった」「苦手なことに取り組めた」などと自信を高めている様子が伝わってくる。

「何人もの卒業生が、大学進学などで地域を離れたあとも、長期休暇やオンライン授業期間などを利用して本校に関わり続けています。彼らにとって本校での経験がどれほどの重みだったのかを実感します」(阿部教頭)

●

毎年改良を重ねてきたT-PLANだが、これで"完成"ではないという。

「生徒たちはもっといろんなことができるかもしれないし、もっと探究を深められるかもしれない。より生徒に合った形で成長させられるよう変化させていきたい」(玉木さん)

今後の課題は、同校の2本柱である教科学習とT-PLAN、双方の学びを関連づけて相乗効果を上げていくことだ。主幹教諭・村岡英子先生は「T-PLANで高まった意欲が教科学習にも活かせるよう工夫していきたい。プロジェクト活動に教科の視点を盛り込むなど、みんなで議論していきます」と語る。同校の進化は今後も続きそうだ。

Interview

大人の方との関わりのなかで勉強にも前向きに

プロジェクト活動のテーマがなかなか決められませんでした。そこでやってみたのが、いろんなボランティアに参加したり、地域の方と話してみたり、片っ端から行動すること。そのなかで「津和野文化祭」という交流イベントの開催にたどり着きました。一人で悩まず行動してみるって大切。「やってみないとわからない」と、やってみてわかった気がします。また、プロジェクトを進めるなかでは、決断を求められることがたくさんあります。自分は優柔不断なのですが、

自分がよく考えて決断したことなら誰も文句は言わないだろうし、失敗しても受け入れてもらえるというマインドに変わりました。実は高校入学前、「勉強だけに縛られる高校生活は嫌」と思い、いろんな活動ができそうな津和野高校を選びました。でも、高校のさまざまな活動で、思考力や発想力をもって活躍している大人の方々と知り合うなかで、自分の無知さや勉強不足を思い知り、今は中学生の頃と比べものにならないほど勉強しています。大学進学し、もっとたくさん学んでいきたいと思います。

(3年生・板垣陽祐さん)

「やりたい」を全力で応援してもらえた

高校時代を振り返って、今の私に大きく影響したと思う経験が2つあります。1つは、T-PLANで、津和野の飲食店に外国人観光客が訪れたときのコミュニケーションをスムーズにするための、英語と中国語の会話カードの作成に取り組んだことです。部活動が忙しくなって完成させられなかったのですが、無駄だったとは感じていません。そのプロセスで、自分の興味を深めていく面白さや、いろんな人と関わりながらつくり上げる価値を学んだからです。もう1つは合唱部の活動です。部員が少なくコンクール出場が困難でしたが、先生方や近

隣の中学校、地域の方に呼び掛けて「合唱部合唱団」を結成し、県大会で金賞を獲得しました。先生方が私たちの「やりたい」を受け止め、全力で応援してくださったことに、とても感謝しています。どちらの活動も、地域と共にある学校教育の重要性を感じることができた活動でした。次は私がそのような学校教育を推進していきたい。そんな目標ができ、今、大学の教育学部で学んでいます。

(同校卒業生／島根大学教育学部1年生・櫻井初花(ういか)さん)